カーペットやシートのレザーの質感、ダッシュパネルの各パートすべてが素晴らしいコンディションのインテリア。特段レストアやカスタムをする要素がないと感じさせてくれるものだが、いずれオーディオなどは追加していく予定とのこと。

Dear Gold

20年越しとなった夢のスタートライン
ストレートの'65デヴィルをニュースタイルOGにアレンジ

ダウンサイジングを余儀なくされる以前のフルサイズのスタイリングが華々しかったアメリカ車。この魅力だけはどうしても他のクルマとは一線を画すもので、カスタムのベースとしてはもちろん、クラシックカーとして世界的に価値ある資産としても注目され続けている存在であり、日本においてもそれは同様。アメリカの街並みに憧れ、アメリカを走るクルマに興味を持ち、アメリカで生まれたカルチャーを愛する人にとって、アメリカ車がアメリカ車らしい時代に誕生したモデルには、特別な思い入れがある人は少なくないだろう。

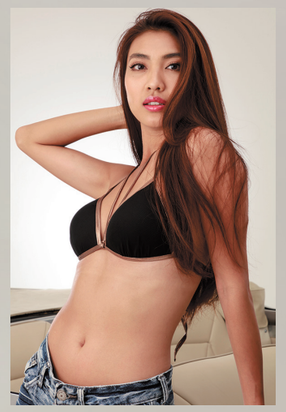
'80年代後半から急速にこれら旧いアメリカ車が輸入されるようになり、ホットロッドやローライダー、トラッキンといったカスタムカルチャーも浸透した'90年代。この頃すでに周辺に'60sのインパラなどが溢れていた時代を横目に、自分もいつかは'60sのキャデラックに乗りたいと思い続けて20年。その夢を諦めることなくタイミングを探り続け、ようやく今年になって実現させたオーナーの安本さん。

最初に購入したクルマは'99年のキャデラックドゥヴィル。その後、ソアラ、ベントレーコンチネンタルGTと乗り継いできた車歴ながらも、常にこの'65年キャデラックへの強い思いが衰えることはなかった。自分自身が乗りこなせる環境や、望むコンディションの個体を待ち続け、ようやく思い描いた個体との巡り合わせを引き寄せたのは、名古屋のグレイスキャブ。扱う車種は幅広いものの、スタッフ全員がクラシック好きでもあり、豊富な経験値と造詣の深さであらゆるカスタムにも対応するショップだ。

このデヴィルはアメリカの内陸で発見し、ロサンゼルスまで陸送後に、グレイスキャブの戸田氏とオーナー自ら現車確認のために渡米。現地で試運転までしてから輸入に至っている。コンセプトはあくまでもシンプルなOGスタイルを軸としたもので、ホイールはビレットのメジャーブランドではなく、あえてLEXANI FORGEDでスペシャルオーダーしたビレット風フィニッシュの20インチをセット。エアサスはACCUAIRのENDO CVTにE-LEVELコントロールの最新システムで、サスペンションはRIDETECH、ブレーキはWILWOODでアシ周辺をアップデート。抜群のコンディションの個体ゆえに、国内での大掛かりなレストア作業を一切必要としなかったという点も特筆すべき部分だろう。

クルマには巡り合わせがあるとはよく言うが、「状態の良い'65年のキャデラックコンバーチブルで、シャンパンゴールド」というかなり絞った条件と重なったクルマを奇跡的に発見し、無事に輸入することが出来たのは、オーナーの20年に渡る強い思いと、それをサポートしたショップの存在があったからこそ。40歳を目前に、「ようやくスタートラインに立った気分」というオーナーの言葉からも、一台のクルマに対する深い愛情の念を垣間見ることができる。

FOREVER
CLASSICS
1965 Cadillac Deville Convertible



青山めぐ
TV タレントとして活躍する彼女は、現在でも雑誌グラビアなどでも背力的に活動中。キックボクシングやラグビーで鍛え上げられたスタイル抜群のボディと、健康的に日焼けした肌が魅力的。
Instagram/@megu_19880928

キャンバス地のコンバーチブルトップも張り替え済みで、シャンパンゴールドのボディとのコントラストも抜群のバランス。張り具合も申し分なく、リアスクリーンはガラスタイプとなっており、クーペボディのような佇まいにも見える。もちろん開閉は電動モーターで駆動。

撮影予定日直前まで最終調整など作業に邁進してくれた Grace Cab の戸田氏とオーナーの安本さん（右）。安本さんは撮影日の早朝に奈良県を出発し、撮影終了後トンボ帰りという強行スケジュール。若い頃にいつかは乗ろうと思っていたキャデのオーナーとなった今、じっくりと時間をかけてこのクルマと付き合っていくつもりだという。もちろん、それをサポートすることができるプロショップとの出会いこそが最も重要だとも語ってくれた。